

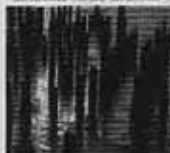
ジャズの歴史を振り返ると、ソニー・ロリンズの「サキソフォン・コロッセア」、ジョン・コルトレーンの「バラッド」、ウェイン・ショーターの「ジュジュ」など、多くのサクセス・アルバムがその時代を作ってきた。そして、多くのリスナーから愛されるこれらの名盤の他に、21世紀の今日も重要な作品はまだ数多くリリースされている。ここではサクセス・プレイヤーのリーダー作として近年にリリースされたアルバムの中から、重要な作品をピックアップしてお届けしよう。

『リメンバリング・ソーズ・フー・ワー』
イェスパー・シロ
STUNT RECORDS
(海外盤)
STUCD 09062



これまでに、スタン・レーベルから多くの良作をリリースしてきた、デンマーク・ジャズの大御所プレイヤー、イェスパー・シロ。本作はオーソドックスなクアルテット編成にストリングスを加えた作品。アルバム全編を通して、スウィング・ジャズ時代にタイム・スリップしたかのようなノスタルジックなサウンドに仕上がっており、とても最近リリースされた作品とは思えない。普段からスタンダードを演奏することが多いイェスパーだが、本作も「ホーン・サンデー・ゲッツ・ブルー」、「アイ・リメンバリー・クリフォード」など、ストリングス・アレンジとの相性が抜群のスタンダード揃い。20世紀のモノクロ映画をふと連想するような、そんな作品。

『プリュスターズ・ルースター』
ジョン・サーマン
ECM
(海外盤)
2701112



ジョン・サーマンとジャック・ティジョネット(ds)の名前が並ぶと、30年ほど前にリリースされた「サイモンの不思議な旅」を思い出してしまう人も多いのではないだろうか。それだけこのふたりのデュオの作品は当時衝撃的だったのだが、実はECMレーベルからこのデュオは他にも何作かリリースされている。2009年に発表された本作は、デュオではないが、ティジョネットとジョンのふたりでは表現しきれない部分をジョン・アバークロンビー(g)とドリュー・グレス(b)が補完しているような感じで、より完成されたふたりの世界が楽しめる作品と言っていこう。相変わらずフリーな世界が全開で、どちらかというところ風景描写が強く、想像力をかきたてる作品に仕上がっている。

『コンパス』
ジョシュア・レッドマン
ワーナーミュージック
(Nonesuch)
WPCR-13355



自身で音楽監督を務めた「SFジャズ・コレクティブ」や、エラストック・バンドなど、これまで多種多様なフォーマットを模索し、コンテンポラリー・ジャズの中心人物のひとりとして活動を続けてきたジョシュア・レッドマン。コード楽器を使用せず、ドラム、ベースとのトリオで構成された本作は、シンプルながら彼の深い音楽性が感じられる。また、このような、表現力がよりシブリアに問われる環境に身を置き、演奏する姿勢からは表現者としての面とは別に、研究者や修行者のような一面も見えてくることのできる。本作を聴く限り、今後もジョシュアはよりストイックにサクソフォンの表現方法を突き詰めていくのだろう。独創的でありながら、すでに完成したサウンドだ。

『スケッチズ・オブ MD〜ライヴ・アット・イリディウム』
ケニー・ギャレット
ビデオアーツ
(Mack Avenue)
VACM-1371



ニューヨークのジャズ・クラブ「イリディウム」におけるライヴを収録した作品。タイトルの「MD」は、マイルス・デイヴィス(tp)のこと。このことからわかるとおり、今でもギャレットは自身のルーツとしてマイルスを大切にしているようだ。今作に収録されたオリジナル「スケッチズ・オブ・MD」では、まさにタイトル通り、ギャレットが在籍していた頃のマイルス・バンドをイメージさせる。また、ケニーの前作「ビヨンド・ザ・ウォール」で共演したファラオ・サンダース(ts)も参加。熱っぽいプレイで花を添えている。収録された5曲すべてがギャレットのこれまでの音楽人生を象徴したような内容になっており、彼の音楽性を理解する上でも重要な1枚と言えるだろう。

『ライヴ・アット・ザ・ヴィレッジ・ヴァンガード』
リー・コニッツ
ワードレコーズ
(Enja)
VOCD-10135



1940年代後半から大きな音楽をとることなく、ほぼ毎年リーダー作をリリースし続けるなど、いまなお第一線で活躍しているジャズ・レジェンド、リー・コニッツ。マイルスをはじめ、スタン・ケンントン(idr)、ギル・エヴァンス(p,arr)、ジェリー・マリガン(bs)ら名だたるトップ・ミュージシャンたちとの共演で経験を積み、進化してきた。その結果、現在最も先進的なスタイルのひとつとして、ニューヨークをはじめとする世界各地で多くのフォロワーを生んでいるという事実も、彼の音楽性の偉大さを表わしているといえるだろう。今回は、前作でも共演したフロリアン・ウェバー(率いる)トリオ・ミンサラ〜とともに、前衛的な表現の種をまくような音楽を展開している。

『ロスト・オン・ザ・ウェイ』
ルイ・スクラヴィス
ECM(海外盤)
1798497



フランスの鬼才、ルイ・スクラヴィスは、クラリネット奏者としての印象が強いかもしれないが、ソプラノ・サクソフォーン奏者としても素晴らしい演奏を数多く残している。クラシックの室内音楽のようなスタイルで、ECMレーベルの中でも独自の路線を歩んでいくが、今回もそのスタンスは変わらない。いち早くエレクトロニクスを取り入れたりするなど、常に新しいものを取り入れてきたが、どんな変化があろうと常にそのスタンスにブレが感じられないのは、まずコンセプトありきで新しいものを取り入れているからだろう。本作は、ルイの情熱的で美しい世界観が十二分に発揮されたクインテット作。目を閉じると、何かしら情景や物語が浮かんでくる。そんな作品に仕上がっている。

『インスピレーション』
マックス・イオナータ
アルボー
ALBCD-004



イタリア・ジャズの良作を日本に紹介する「アルボー」から2009年にリリースされた、マックス・イオナータの国内リーダー作。フンボーン・カルテットの王道をいく、オーソドックスなハード・バップが楽しめる。イタリア人プレイヤーの多くが幼少からクラシックの素養があるため、テクニクは抜群。カルテットでスタンダードを演奏……よくあるコンセプトであるだけに、演奏する側にもセンスと音楽力が必要になるが、マックスはこの作品で軽々とハードルを超えてみせた。それまで知名度が高いとは言えなかったマックスだが、この作品のヒットで、彼の名は日本のサクソ・ファンに広く浸透したのではないだろうか。まだ若いプレイヤーだけに、次回作以降も気になること。

『ゴーン』
リッチ・ベリー
STEEPLE CHASE
(海外盤)
SCCD31670



リッチ・ベリーは、マリア・シュナイダー(p,arr)のビッグバンドや、サド=メル・オーケストラにも在籍し、ビッグバンドのセクション・プレイヤーとして数々の名演を残してきたテナー奏者だ。コンボでもサイドメンとして、フレッド・ハーシュ(p)やジャド・ムラーツ(b)をはじめ、多数のミュージシャンから厚い信頼を受けており、隠れた名演も多い。本作は、そんなリッチが10年以上も演奏し続けているメンバーたちと作り上げた作品。お互いを良く知ったメンバーによる演奏には、音楽的にも安心感がある。リッチのサクソは、バリバリ吹きまくるというよりもどちらかと言えば落ち着いたタイプ。緊張感ではなく、包容力のあるジャズと言えよう。

『レニーズ・ベニーズ』
ロザリオ・ジュリアーニ
Dreyfus
(海外盤)
FDM36952



テナー・サクソと聴き違えてしまうような、太い音色と、繊細なプレイングが持ち味のアルト/ソプラノ・プレイヤー、ロザリオ・ジュリアーニ。先に紹介したマックス・イオナータや、ダニエル・スカナビエコと同様にイタリア出身のプレイヤーだ。イタリア・ジャズの巨匠、エンリコ・ピエラヌツィ(p)にも認められ、デュオで共演したりとその実力は両側のプレイヤーの中でも秀でている。一気に吹きまくるハード・パビッシュなプレイから、熱く歌い上げるバラッド、モード・ジャズまで、幅広いプレイ・スタイルを持っているが、今作ではヴァリエーション豊富な楽曲が並び、彼の幅広い音楽性を味わうことができる。また、日本のライヴがないだけに、来日公演が待たれる。

『リブラ』
ティム・ガーランド
Global Mix
(海外盤)
GM2CD03



チック・コリアのオリジナルで唯一有名になったティム・ガーランドだが、ビル・ブラッフォード(ds)のユニット「アースワークス」に参加して以降は、より一層現代音楽やプログレ色が強くなっているようだ。本作は、ティムとグウィリム・シムコック(p)、アサフ・シルキス(perc)の3人によるトリオをメインに、ロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラが参加した2枚組のアルバム。オーケストラの参加した「フロンティア・スイート」は、壮大なスケールの組曲で、未開の地を求めて宇宙を旅するような壮大さを感じさせる。また、本作に収録されている「バ・デル・ソル」は「アースワークス」でも演奏しているが、トリオでの演奏は、より洗練され濃密な演奏に仕上がっている。

『トラヴェラー』
ティネカ・ボスマ
ファイフ・ファイヴ
FNCJ-5537



ティネカ・ボスマは、オランダ出身の女性サクソ奏者。学生時代にマンハッタン音楽大学でクリス・ボッター(ts)やデイヴ・リーブマン(se)に師事し、プレイスタイルにもその影響が色濃く表れている。これまでに発表したアルバムはどれも高い評価を得ており、芯の太いアグレッシブなプレイ・スタイルには日本でもファンが多い。このアルバムは、ドラマのテリ・リン・キャリントンが、2002年にティネカと出会ったことがきっかけで始まったプロジェクトによるもの。テリ・リンをはじめ、スコット・コリー(b)、ジェリー・アレク(p)ら素晴らしいメンバーのサポートを得て、ティネカもアグレッシブなプレイを展開している。彼女はまだ30代になったばかり。今後の動向も注目される。

『ルーシダ・グレイ』
トーレ・ブリュンボルグ
DRAVLE RECORDS
(海外盤)
JZ090227-02



トーレ・ブリュンボルグは、1960年生まれのサクソ奏者。ノルウェーのトロンハイム音楽院でジャズを学んだ後、ヨーン・バルグ(p)を中心としたユニット「オスロ13」に参加。このメンバーは、ニルス・ベッター・モルヴェル(tp)など、今まさにノルウェー・ジャズ界を牽引しているミュージシャンばかりだった。その後シーンで活躍し始め、近年はマヌ・カチエ(ds)やトルド・グスタフセン(p)ら、ECMミュージシャンのアルバムへの参加も増えている。本作は、トーレの得意とするサクソ・トリオによるもの。透明感のあるサウンドは彼ならではのものだ。また、今年4月にはケッセル・ビヨルンスタ(p)、ジョン・クリステンセン(ds)とのトリオ名義で、ECMより「リメンバランス」(海外盤)もリリースした。